

人際關係與敬語的呼應關係

— 以『大家的日語』為例 —

尾崎 學

世新大學日本語文學系兼任講師

中文摘要

本稿以教科書『大家的日本語』為分析對象並針對人際關係與敬語間的呼應關係做一考察。結果發現多數第三者敬語的例文中說話者及聽話者的關係位置的人稱未必會出現在文中。依據此現況提出在使用敬語時①先提示對內・對外的概念以及親・疎關係的概念②進而提示文中的人稱，確認使用敬語的對象。並且提出教師可運用「符號・下底線・框線」的方式明確地提示呼應關係。

關鍵詞：第三者敬語、內・外概念、親・疎關係概念、人稱的提示、符號・下底線・框線

人間関係と敬語の呼応関係について —『みんなの日本語』を例にして—

尾崎 学

世新大学日本語文学系非常勤講師

要 旨

本稿では、教科書『みんなの日本語』を対象に選んで人間関係と敬語の呼応関係について考察した。その結果例文には数多くの第三者敬語が提出されているものの、話し手と聞き手および第三者の位置関係となる人称が必ずしも文中に現れているわけではないという現状が明らかになった。この現状を踏まえ、敬語を扱う場合には、①ウチ・ソトの概念と親・疎関係の概念を提示したうえで、②文中に人称を出現させて敬語の向けられる人物を確認する作業が行われるべきであることを述べた。また、教師が行う作業として「符号・下線・枠」を用いて呼応関係を明確に示すという方法を提案した。

キーワード：第三者敬語、ウチ・ソトの概念、親・疎関係の概念、人称の提示、

符号・下線・枠

The Agreement between Human Relations and the Honorifics to be Used

- A Case Study in “Minna no Nihongo” (Everybody’s Japanese).

Ozaki, Manabu

Part-time Instructor in the Department of Japanese Language and Literature,
Shin Hisn University, Taiwan

Abstract

This paper is a study on the agreement relations between persons involved and the honorific used on the basis of the textbook 'Minna no Nihongo' (Everybody's Japanese). As a result of the study, it became apparent that, although many examples of the 3rd person honorifics were presented there, the person in the position of the speaker, the listener, or the 3rd person was not always clearly expressed in sentences. Based on this fact, I proposed here that, in dealing with the Japanese honorific system, we should (1) first present the concepts of *uchi/soto* (ingroup/outgroup) and of intimate/non-intimate relationships and then (2) take up the work of clarifying the interacting persons to whom honorifics apply, by exposing the persons within each sentence. I also proposed as a task for teachers a method of precisely illustrating the agreement relationships between persons using diacritic marks, underlines, and frames.

Key words : 3rd person honorifics, the concepts of uchi/soto, the concepts of intimate/non-intimate, presentation of persons, diacritical marks, underlines, frames

人間関係と敬語の呼応関係について —『みんなの日本語』を例にして—

尾崎 学

世新大学日本語文学系非常勤講師

1. はじめに

日本語学習者は敬語の使用に不安を抱いている。今回筆者が担当したクラス¹を通じて分かったことは、誰に対して敬語が用いられているのかが学習者にはきちんと捉えられていない点であり、とりわけ話題の人物（以下「第三者」とする）に向けられる場合には当惑していた。聞き手と第三者のどちらに敬語が用いられているのかを混同していることは既に筆者が指摘した問題点であり²、今回のクラスにもみられるように、上級者と言っても過言ではないビジネス日本語学習者でも人間関係に応じた敬語を扱えない状況にある。敬語を使用するには、人間関係を捉えて、それに応じて統語的に適切な位置に適切な敬語を用いるという習慣化が重要である。学習者に対する習慣化を目指すには早期の段階—基礎を固める段階—に始められることが望ましいのだが、学習者ははじめのうちは教科書に頼る部分が大きく、

1 中国文化大学推廣教育部の「商用日文班」（2004.10.30～2005.1.15）で週1回3時間。日本人とビジネス関係にあり日本語能力検定1・2級に合格した日本語学習者により編成されたクラスである。

2 誰に対して敬語が用いられているのかを理解できていない学習者がある。詳しくは拙稿（2004 a）を参照されたい。

しかも教科書が学習者に与える影響を考慮した場合、教師は指導の際に用いる教科書ではどのように扱われているのかを知っておく必要がある。本稿では教科書での敬語を学習する課を考察し、人間関係と敬語がいかに提出されているかに注目する。その結果から教師が教科書を用いて指導するうえでの注意点を述べ、指導法の提案を試みる。

2. 敬語表現のための人間関係に注目した先行研究

周知のように、敬語を用いて表現するうえで、敬語語彙の知識を身につけることはもちろん、言語行動の成立要素、たとえば話し手が相手を待遇しようとする意図や、発話場面、人間関係の把握などが重要であることは言うまでもない。この点については杉戸：1983、菊地：1997a、蒲谷・川口・坂本：1998が既に言及していることからその重要性がうかがえる。これらの成立要素を把握することは日本語学習者にとっても例外ではない（尾崎：2004b）。成立要素により敬語表現が形成されるならば、教科書においては、少なくとも発話場面と人間関係が整理され提示されそれが表現に結びついていることが学習者に伝わるものでなければならない。管見によれば、これまでに第三者を含めた人間関係と敬語の呼応関係に注目して教科書分析を行い、その結果を基にして学習者に対する指導法を提案したような研究は見当たらない。以上のことを踏まえると、教師の役目として教科書を考察し、問題点を指摘し、その問題点を克服できるような指導法を提案することが学習者を敬語使用に導くための一助となると筆者は考える。

2.1 考察の概要

2.1.1 考察対象の教科書

考察の対象として日本で編まれた教科書のうち『みんなの日本語』を選んだ。こ

のテキストは非日本語母語話者が海外で指導する場合は「文型積み上げ」で使用し、母語話者が海外で教える場合はコミュニカティブにも使えるように汎用性を持たせたものと言える。このように、文型と運用の両側面を備えたテキストという点ならびに台湾地域でも広く使用されていることにより選定するに至った。

2.1.2 考察の内容と方法

本稿では次の3つを考察する。「一」は動詞が前接することを表す。

1) 敬語表現の整理：

尊敬語：特定形・「お/ごーになる」形・「ーれる・られる」形

謙譲語：A類「おーする」形・「ごーする」形・言い換え形、B類、AB類

2) 人間関係の提示：敬語を用いる動作主とその受け手の提出状況

3) 場面：フォーマルかインフォーマルか

以上を表にまとめる。整理するうえで表を2分して、1つは文型・例文・練習A・練習B、1つは運用の側面が重視されている会話と練習Cにまとめ、前者を①とし、後者を②とする。分類・整理するにあたり菊地（1997a：254－322）の分類に倣って、「特定形」・「謙譲語A」・「謙譲語B」・「謙譲語AB」・「言い換え形」・「補語」という用語を借用する。表にまとめる際の考察方法は、まず敬語を抽出し、次にその敬語の向けられる待遇対象（話し手・聞き手・第三者）を明確にする。また、その敬語が用いられている場面を示す。

3. 尊敬語

『みんなの日本語』の49課では尊敬語が提出されている。以下、この課で提出されている尊敬語動詞について概観する。範囲はp124からp129までである。

3.1 特定形

特定形とは、「する」「行く・来る・いる」「食べる・飲む」のような特定の動詞

に対応する形が「なさる」「いらっしゃる」「召し上がる」という特定の形に言い換えることができる形の類を指す。

表 1 場面・待遇対象と特定形の提出状況

① 文型・例文・練習 A・練習 B

提出場	聞き手	△待遇対象 (動作主)	提出語彙 〔△△尊敬語+丁寧語〕	提出場	聞き手	△待遇対象 (動作主)	提出語彙 〔△△尊敬語+丁寧語〕
文型 3	無	部長	出張なさい <u>ます</u> 。	練習 B 7	無	田中さん	いらっしゃい <u>ました</u> か。
例文 3	無 (聞き手)		<u>ご覧</u> になりますか。		無	松本さん	いらっしゃい <u>ます</u> か。
例文 4	無 (聞き手)		<u>ご存じ</u> ですか。		無	奥様	召し上がり <u>ます</u> か。
例文 5	無 (聞き手)		<u>召し上がり</u> ますか。		無	社長	<u>ご存じ</u> ですか。
	無 (聞き手)		<u>おっしゃ</u> ってください。		無	だれが	なさい <u>ます</u> か。
例文 6	<u>無</u>	松本部長	いらっしゃい <u>ます</u> か。	練習 B 8	<u>無</u>	田中さん	いらっしゃい <u>ました</u> か。
練習 A 6	無	社長	いらっしゃい <u>ました</u> 。		<u>無</u>	—	いらっしゃたと思ひ <u>ます</u> 。
	無	社長	なさい <u>ます</u> 。		<u>無</u>	課長	召し上がり <u>ます</u> か。
練習 B 6	無 (聞き手)		いらっしゃい <u>ます</u> か。		<u>無</u>	—	召し上がると思ひ <u>ます</u> 。
	無 (聞き手)		いらっしゃい <u>ます</u> か。		<u>無</u>	田中さん	いらっしゃい <u>ます</u> か。
	無 (聞き手)		<u>ご覧</u> になりましたか。		<u>無</u>	—	いらっしゃると思ひ <u>ます</u> 。
	無 (聞き手)		<u>召し上がり</u> ますか。				
	<u>無</u>	お子さんの お名前	おっしゃい <u>ます</u> か。				

② 練習 C と会話

提出場	場面	話し手	聞き手	△待遇対象 (動作主)	提出語彙 〔△△尊敬語+丁寧語〕
会話	電話する (—)	クララ (母)	<u>先生</u>	伊藤先生	いらっしゃい <u>ます</u> か。
練習 C 2	無 (—)	A	B	無 (B)	<u>なさ</u> っていますか。

以下は表の中の記号の意味を表わす。記号は学習者に対して呼応関係を示すためのもの。

聞き手の部分 「無」は、丁寧語が聞き手に向けられているが、文中に人称の提示がないことを表す。

「無」「先生」は、丁寧語が聞き手に向けられていることが、対話形式を通じて推測できることを表す。

待遇対象の部分 「無(聞き手)」は、尊敬語と丁寧語の双方が聞き手に向けられているが、文中に人称の提示がないことを表す。

「無(B)」は、尊敬語と丁寧語の双方がBに向けられているが、文中に人称の提示がないことを表す。

「社長」は、文中には人称が提示されていないが、模範例を通じて推測できることを表す。

「一」は、文中に人称が提示されていないことを表す。

提出語彙の部分 「□」は、聞き手に向けられていることを示す。

場面の部分 「(一)」は、状況の説明がないことを表す。

その他 「太字」は、待遇対象とその待遇値との呼応を表す。

「^」は、高めることを表し、「^^」は、尊敬語を表す。

「+」は、遠い関係の人物に対する丁寧語を表す。

49 課 (①・②をあわせた) の 26 例のうち、「特定形」が聞き手(動作主)に向けられる(厳密に言えば「聞き手を高める」の意)のは 9 例であり、その聞き手が具体的³に文中に現れているのは 0 例(無(聞き手)・無(B))である。第三者(動作主)に向けられるのは 17 例であり、その第三者が具体的に文中に現れているのは 13 例である。第三者に「社長・(松本) 部長・課長・伊藤先生」という 4 種の肩書きのほか、「お子さん(のお名前)・田中さん・松本さん・奥様・(だれが)」といった人物に対して特定形が用いられている。17 例のうちの 8 例(聞き手の部份の

3 「具体的」とは、話し手が聞き手に対して「あなた」や「相手の氏名」に「さん」を添えた呼びかけのことである。

「無」は聞き手の存在自体（発話行為が聞き手に向けられていること）が捉えられにくく、9例は手がかり（「無」は返答形式、「先生」は役割提示）を介して聞き手が存在することを推測できる⁴。

①の場面は「フォーマル」か「インフォーマル」かの提示がなく、②の場面は会話では「フォーマル」と読み取れるが、練習C2では提示がない。

3.2 「お/ごーになる」形

「おーになる」形とは「お+和語動詞の連用形+になる」という形の類であり、「ごーになる」形とは「ご+漢語系の熟語+になる」という形の類を指す。なお、表は紙面の都合上割愛し、考察のみ以下に述べる。

49課の19例のうち、「おーになる」形が聞き手に向けられるのは9例であり、その聞き手が具体的に文中に現れているのは0例（無（聞き手）・無（B））である。第三者に向けられるのは10例であり、その第三者が具体的に文中に現れているのは8例（「社長」・「一」以外）である。第三者に「社長・部長・先生」という3種の肩書きの人物に対して「おーになる」形が用いられており、なかでも「社長」に対しての使用が多い。このほか「松本部長の奥様」という具体的な人物に対して用いられている。10例のうちの8例（「無」）は聞き手の存在自体が捉えられにくく、2例（「無」）は返答形式の手がかりを介して聞き手が存在することを推測できる。

①・②の場面ともに「フォーマル」か「インフォーマル」かの提示がない。なお、「ごーになる」形の例文は見当たらない。

3.3 「～れる・られる」形

「～れる・られる」形とは、動詞の未然形に助動詞の「れる」「られる」を添え

4 「推測できる」と述べたのは、教師による何らかの説明を介さない場合には、学習者自身では話し手と聞き手、第三者の関係が捉えられない可能性があるということである。

た形の類を指す。なお、表は紙面の都合上割愛し、考察のみ以下に述べる。

49 課の 19 例のうち、「一れる・られる」形が聞き手に向けられるのは 9 例であり、その聞き手が具体的に文中に現れているのは 0 例（無（聞き手）・無（B））である。第三者に向けられるのは 10 例であり、その第三者が具体的に文中に現れているのは 8 例（「伊藤先生」・「一」以外）である。第三者に「社長・部長・課長・（伊藤）先生」という 4 種の肩書きの人物のほか、「イーさん」という具体的な人物に対して「一れる・られる」形が用いられている。10 例のうちの 8 例（「無」）は聞き手の存在自体が捉えられにくく、2 例（「無」）は返答形式の手がかりを介して聞き手が存在することを推測できる。

練習 A には「聞く・急ぐ・呼ぶ・会う・待つ・話す・かける・おきる・おりる・する」の 10 種の動詞が提出されているが、語形の変化規則を練習するのが目的であるため、いずれも人物は示されておらず、もちろん場面についての説明も見当たらない。①・②の場面ともに「フォーマル」か「インフォーマル」かの提示がない。

3.4 尊敬語の検討とまとめ

49 課の計 64 例のうち、尊敬語が聞き手に向けられているのは 27 例であり、具体的に文中に現れているのは 0 例である。第三者に向けられているのは 37 例であり、具体的に文中に現れているのは 29 例である。裏を返せば 8 例が現われていないことになる。後者に注目すれば、話し手・聞き手・第三者を必要とする文が 37 例あることを意味し、そのうちの 24 例は聞き手の存在自体が捉えられにくく、13 例は返答形式の手がかりを介して聞き手に向けられることを推測できる。菊地（1997a：117）は「その場にいない 3 人称者を高めて待遇すること（〈第三者敬語〉という）は、2 人称者の場合に比べてさほど多くはない。」と述べているが、例文には第三者敬語の提出が多い。どのような尊敬語形式がどのような第三者に向けられているのかが次の表 2 によりわかる。

表2 待遇対象とその尊敬語形式

待遇対象 (第三者・話題の人物)	尊敬語形式	語彙の内訳
社長	特定形・おーになる形・(ら)れる形	いらっしゃる・なさる・召し上がる・お帰りになる・お休みになる・お書きになる・帰られる・建てられる
部長・松本部長	特定形・おーになる形・(ら)れる形	いらっしゃる・出張なさる・お吸いになる・お決めになる・お話しになる・出張される
課長	特定形・(ら)れる形	召し上がる・帰られる・読まれる
先生・伊藤先生	特定形・おーになる形・(ら)れる形	いらっしゃる・お買いになる・でかけられる・こられる
松本部長の奥様・奥様	特定形・おーになる形	いらっしゃる・お作りになる
田中さん・松本さん・イーさん	特定形・(ら)れる形	いらっしゃる・召し上がる・来られる
お子さん	特定形	おっしゃる
その他(だれが)	特定形	なさる

社長と部長といった職階の人物に対しての尊敬語の使用が多く、課長に対しては「おーになる」形⁵が、奥様に対しては「ーれる・られる」形の提出がみられない。

3.5 ウチ・ソトの概念と親・疎関係の概念の提示

第三者敬語の例文が半数を占めているわりには、話し手と聞き手との親疎関係、第三者が話し手と聞き手のどちらに属する人物なのかといった解説が示されていないため、とりわけ運用を重視する場合にそなえて「話し手は聞き手を遠い関係であると位置付け、聞き手に関係する人物である(発話の場にいらない)第三者を高めて待遇する」という点は教師が補わなくてはならない。この関係を表すのが次の図

5 山本(1992:296)は「『おーになる』形は、敬意の高い尊敬語であり、話し手の所属集団、つまり『ウチ』の関係の目上の人の中でも最も上位の人に使用され、その他の目上の人や疎の関係にある人に対してはそれほど使用されない」と述べている。この指摘と同じようなことが教科書での課長の扱いにもみられた。

1である。

図1 第三者に対する尊敬語使用 [網掛けは、発話の当事者同士を意味する。]

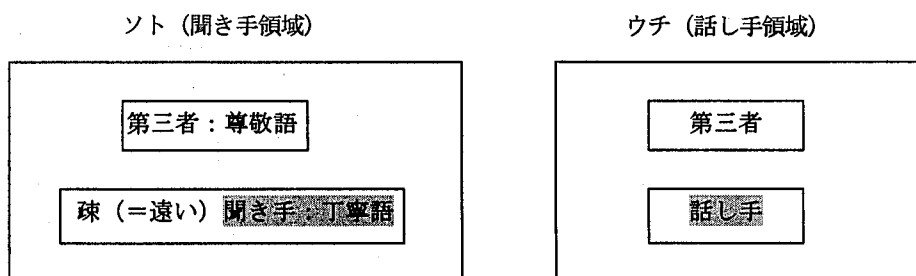


図1は、大きくウチとソトに分け、ウチには話し手と話し手に属する第三者が、ソトには聞き手と聞き手に属する第三者が位置付けられる。話し手にとっては、ソトに位置付けられた聞き手には「疎」に基づき丁寧語が用いられ、第三者には「ソト」に基づき尊敬語が用いられる。

4. 謙譲語

『みんなの日本語』の50課では、謙譲語が提出されている。この課で提出されている謙譲語動詞について概観する。範囲はp134からp139までである。

「話し手の提示・受け手の提示」に記した「□」は、実際に具体的な人称が当該の文中には明示されていないものの、対話形式による提示であるため、前者は動作主が1人称であること、後者は受け手が2人称であることを推測できるという意味である。同じように②のスクリプトでは、「A」「B」のような役割が提示されているものの、具体的な人称が当該の文中には明示されていないことを表す。これを以下では便宜上「手がかり」という言葉で表す。なお、「話し手の提示・受け手の提示」がない場合は、筆者が「仮提示 ()」を補足する。

4.1 謙譲語 A

謙譲語 A とは、「行為の向かう先である補語に対する敬語」であり、「お～する」形・「ご～する」形・「言い換え形」に分けられる。

4.1.1 「お～する」形

「お～する」形とは、「お+和語動詞の連用形+する」という形の類を指す。

表 3 場面・待遇対象と「お～する」形の提出状況

① 文型・例文・練習 A・練習 B

提出場	▼ 動作主 (話し手・話し手の身内) [動作の与え手]		提出語彙 [▲▲謙譲語+丁寧語]	動作 行為 方向 →	△ 待遇対象 [動作の受け手]	
	話し手の提示	(話し手の仮提示)			受け手の提示	(受け手の仮提示)
文型 1	無	(わたくし)	お送りします。		無	(あなたに)
練習 A1	わたくし		おかしします。		無	(あなたに)
	わたくし	(わたくし)	おおくります。		無	(あなたのために)
	わたくし	(わたくし)	おいれします。		無	(あなたのために)
	無	(わたくし)	お願いします。		聞き手	(あなたに)
例文 1	無	(わたくし)	お持ちしましょうか。		聞き手	(あなたのために)
	無	(わたくし)	お手伝いしましょうか。		無	(あなたを)
	無	(わたくし)	おいれしましょうか。		無	(あなたのために)
	無	(わたくし)	お持ちしましょうか。		無	(あなたのために)
練習 B1	無	(わたくし)	お貸ししましょうか。		無	(あなたに)
	無	(わたくし)	お送りしましょうか。		無	(あなたを)
	無	(わたくし)	おいれします。のでー		無	(あなたのために)
	無	(わたくし)	お呼びします。のでー		無	(あなたのために)
	無	(わたくし)	お撮りします。のでー		無	(あなたを)
	無	(わたくし)	お知らせします。のでー		無	(あなたに)
	無	(わたくし)	お渡しします。のでー		無	(あなたに)
	無	(わたくし)			無	(あなたに)

② 練習C

提出場	▼動作主(話し手・話し手の身内) 〔動作の与え手〕		提出語彙 〔▲▲謙譲語+丁寧語〕	動作 行為 方向 →	△待遇対象 〔動作の受け手〕	
	話し手 の提示	(話し手の仮提示)			受け手 の提示	(受け手の仮提示)
練習C1	A	(わたくし)	お持ちしましょうか。		B	(あなたのかばんを)
	A	(わたくし)	お手伝いしましょうか。		B	(あなたを)
練習C3	A	(わたくし)	お貸ししましょうか。		B	(あなたに)
	B	(わたくし)	お願いします。		A	(あなたに)
	B	(田中であるわたくし)	お電話します。 ⁶		A	(ミラーさんに)

「△」は高めることを表す。「▼」は低めることを表し、「▲▲」は「▼」の人物の行動を表す。

21例のうち、「お～する」形が聞き手(受け手)に向けられているのは20例である。その聞き手が具体的に文中に現れているのは0例であり、手がかりを介して聞き手に向けられていることを推測できるのは7例(聞き手・A・B)である。

第三者(受け手)に向けられているのは練習C3の1例である。その第三者が具体的に文中には現れていないが、手がかりを介して第三者に向けられていることを推測できる。具体的に文中に動作主(話し手・話し手の身内)が現れているのは練習A1の1例であり、手がかりを介して動作主が存在することを推測できるのは9例(「わたくし」・無・A・B)である。①・②の場面ともに「フォーマル」か「インフォーマル」かの提示がない。

4.1.2 「ご～する」形

「ご～する」形とは、「ご+漢語系の熟語+する」という形の類を指す。

6 「お電話する」は、謙譲語Aとして使われることも、美化語として使われることもある。菊地(1997a:283)より。なお本稿では、話し手の田中が呼び出し人である第三者のミラーを高める謙譲語Aとして扱い、聞き手と第三者を組織的位置付けにより一体であるという扱いはしない。

表 4 場面・待遇対象と「ごーする」形の提出状況

① 例文・練習 A・練習 B

提出場	▼動作主 (話し手・話し手の身内) 〔動作の与え手〕		提出語彙 〔▲▲謙譲語+丁寧語〕	動作 行為 方向 →	△待遇対象 〔動作の受け手〕	
	話し手 の提示	(話し手の仮提示)			受け手 の提示	(受け手の仮提示)
例文 2	無	(ガイドのわたくし)	ご案内します。		聞き手	(みなさまを)
練習 A1	わたくし		ごせつめいします。		無	(あなたに)
	わたくし	(わたくし)	ごれんらくします。		無	(あなたに)
	わたくし	(わたくし)	ごあんないします。		無	(あなたを)
練習 B2	無	(わたくし)	ご案内します。		無	(あなたを)
	無	(わたくし)	ご紹介します。		無	(あなたに)
	こちら	(わたくし)	ご用意します。		無	(あなたのために)
	無	(わたくし)	ご連絡します。		無	(あなたに)
	無	(わたくし)	ご招待します。		無	(あなたを)
	無	(わたくし)			無	

② 練習 C

提出場	▼動作主 (話し手・話し手の身内) 〔動作の与え手〕		提出語彙 〔▲▲謙譲語+丁寧語〕	動作行 為方向 →	△待遇対象 〔動作の受け手〕	
	話し手 の提示	(話し手の仮提示)			受け手 の提示	(受け手の仮提示)
練習 C2	わたくし		ご案内します。		B	(あなたを)
	わたくし		ご招待します。		B	(あなたを)
	わたくし		ご紹介します。		B	(あなたに)

12 例のうち、「ごーする」形が聞き手に向けられているのは 12 例である。その聞き手が具体的に文中に現れているのは 0 例であり、手がかりを介して聞き手に向けられていることを推測できるのは 4 例 (聞き手・B) である。具体的に文中に動作主が現われているのは 5 例 (「こちら」を含む) であり、手がかりを介して動作主が存在することを推測できるのは 3 例 (無・「わたくし」) である。①・②の場面ともに「フォーマル」か「インフォーマル」かの提示がない。

4.1.3 「言い換え」形

「言い換え」形とは、「きく・訪問する」「飲む・もらう」「見る」のような特定の動詞に対応する形が「うかがう」「いただく」「拝見する」という特定の形に言い換えることができる形の類を指す。

表 5 場面・待遇対象と「言い換え」形の提出状況

① 例文・練習 A・練習 B

提出場	▼動作主 (話し手・話し手の身内) [動作の与え手・受け手]		提出語彙 [▲▲謙譲語＋丁寧語]	動作 行為 方向 →	△待遇対象 [動作の受け手・与え手]	
	話し手の提示	(話し手の仮提示)			受け手・与え手の提示	(受け手・与え手の仮提示)
例文 5	無	(駅員であるわたくし)	拝見します。		聞き手	(あなたの切符を)
例文 6	無	(わたくし)	伺いました。	←	部長から	
練習 A4	無	(わたくし)	うかがいました。		先生のお宅へ	
	無	(わたくし)	おめにかかりました。		先生の奥様に	
	無	(わたくし)	はいけんしました。		無	(××さんの写真を)
練習 B6	無	(わたくし)	いただいてもー	←	無	(あなたのお茶を)
	無	(わたくし)	拝見してもー		無	(あなたのアルバムを)
	無	(わたくし)	うかがつてもー		お宅へ	(あなたのお宅)
	無	(わたくし)	いただいてもー	←	無	(あなたのパンフレットを)
	無	(わたくし)	うかがつてもー		無	(あなたに)

10 例のうち、「言い換え」形が聞き手に向けられているのは 6 例である。その聞き手が具体的に文中に現れているのは 1 例 (お宅) であり、手がかりを介して聞き手に向けられていることを推測できるのは 1 例 (聞き手) である。第三者に向けられているのは 4 例であり、その第三者が具体的に文中に現れているのは 3 例である。なお練習 A4 の 1 例 (結婚式の写真をはいけんしました) は同じ練習問題にあるほかの例文を通じて第三者に向けられていることがわかる。具体的に文中に動作主が現れているのは 0 例であり、手がかりを介して動作主が存在することを推測できるのは 2 例 (無) である。

動作行為の方向は、話し手側からは「拝見する・うかがう（行く・聞く）・おめにかかる」の3例であり、聞き手側からは「うかがう（聞く）・いただく（飲む・もらう）」⁷の2例である。

練習A4の「先生のお宅」と練習B6の「お宅」は、2人称者が然るべき人物の存在場所を指している。①の場面は「フォーマル」か「インフォーマル」かの提示がない。

4.1.4 謙譲語Aのまとめ

計43例のうち、聞き手に向けられているのは38例である。その聞き手が具体的に文中に現れているのは「お宅」の1例であり、手がかりを介して聞き手に向けられていることを推測できるのは12例である。第三者に向けられているのは5例である。その第三者が具体的に文中に現れているのは3例であり、手がかりを介して第三者に向けられていることを推測できるのは2例である。

具体的に文中に動作主が現れているのは6例であり、手がかりを介して動作主が存在することを推測できるのは14例である。

4.1.5 謙譲語Aの検討

謙譲語のA種類には、主語を低め、補語を高めるという性質がある。「主語は1人称者（話し手自身か身内）のことが多い」（菊地 1997a : 262）という点を踏まえれば、例文では動作主の提示が少ないことも納得が行くが、「時には2人称者や3人称者を主語とする場合もありうる」（菊地 1997a : 262）。補語について言えば、2人称者の場合が多い（菊地 1997a : 259）ことを踏まえれば、例文では聞き手に向けられる謙譲語使用が多いことから、受け手の提示が0例であることもうなずける。

謙譲語の向けられる方向に注目すると聞き手に向けられている例文が大半を占

7 謙譲語Aの性質は、話し手が行為の向かう先である補語を高めることにある。「うかがう」「いただく」は、話し手が行為を受けるという点で、動作行為の方向を異にするが、補語を高める性質は同じであるため便宜上A類に含める。詳しくは菊地（2003b : 13,27）を参照のこと。

めており、学習者には『謙譲語＋ます』全体が聞き手に向けられている」と解釈される可能性を示唆している。かりに学習者には、このように理解され、聞き手への謙譲語使用であるという独自の規則化がなされたとして、唯一提出されている第三者に向けられた「お電話します」と、表7「言い換え」形の待遇対象が提示される「部長からうかがいました。」のような例に接することで、『謙譲語＋ます』全体が聞き手に向けられている」という一般化が成立しなくなり、修正を余儀なくされる。

注意しなければならないのは、「おおくりします」と「ご紹介します」にみられる「聞き手」と「第三者」の扱いについてである。

- (1) 私が（あなたのために）ぶちょうをおおくりします。（練習 A1）
- (2) （わたしがあなたに）最初に伊藤先生をご紹介します。（練習 B2-1）

（ ）は筆者によるものであり、この提示がなされない場合は学習者には「謙譲語＋ます」の向けられる人物として文中に現れている「ぶちょう」と「伊藤先生」に向かう可能性がある。

4.2 謙譲語 B

謙譲語 B とは、「聞き手に対する敬語」であり、「まいる」「申す」「いたす」「存じる」「おる」のほか、サ変動詞の「する」を「いたす」に変えた「－いたす」を指す。

表 6 場面・待遇対象と謙譲語 B の提出状況

① 文型・例文・練習 A・練習 B

提出場	▼ 動作主 (話し手・話し手の身内) [動作の与え手]		提出語彙 [▲▲謙譲語+丁寧語]	動作行 為方向 →	▲待遇対象 (聞き手) [動作の受け手]
	話し手の提示	(話し手の仮提示)			
文型 2	わたくし		参りました。		—
例文 3	わたくし		まいります。		聞き手
例文 4	無	(わたしの家族)	おります。		聞き手
例文 7	ミラー	[ミラーの視点]	と申します。		—
練習 A 5	わたくし=ミラー	[ミラーの視点]	ともうします。		—
	わたくし	(わたくし)	まいりました。		—
	わたくし	(わたくし)	つとめております。		—
練習 B 4	無	(わたくし)	参ります。		—
	無	(わたくし)	いただきました。		—
	無	(わたくし)	引っ越しいたします。		—
	無	(わたくし)	まいります。		そちらへ
	無	(わたくし)	勤めております。		—
練習 B 5	無	(山田)	出かけております。		聞き手
	無	(グブタ)	出発いたします。		聞き手
	無	(課長の中村)	出張しております。		聞き手
	無	(ミラー)	まいりません。		聞き手
	無	(部長の松本)	まいりました。		聞き手
練習 B 7	無	(わたくし)	参ります		聞き手
	無	ミラー [ミラーの視点]	と申します。		聞き手
	無	(わたくし)	参りました。		聞き手
	無	(わたくし)	勉強しております。		聞き手
	無	(わたくし)	存じております。		聞き手

②練習Cと会話

提出場	▼動作主(話し手・話し手の身内) [動作の与え手]		提出語集 [▲▲謙譲語+丁寧語]	動作 行為 方向 →	▲待遇対象(聞き手) [動作の受け手]	
	話し手の提示	(話し手の 仮提示)			受け手の提示	受け手の仮提示
会話 練習C3	ミラー [ミラーの 視点]	(わたくし)	緊張いたしました。		司会者	(聞き手である司 会者)
	ミラー [ミラーの 視点]	(わたくし)	思っております。		司会者	(聞き手である司 会者)
	ミラー [ミラーの 視点]	(わたくし)	感謝いたします。		(司会者を含めた)皆様	
	田中[田中の視点]		と申しますが一		A	(聞き手)
	ミラー		出かけておりますが。		B	(聞き手)
	ミラー		取っておりますが。		B	(聞き手)
	ミラー		外しておりますが。		B	(聞き手)

29例のうち、動作主が具体的に文中に現われているのは8例である。内訳は、「わたくし」が2例、ミラーの視点が2例、田中の視点が1例、ミラーを身内扱い(斜めの部分)にしたのが3例であり、手がかりを介して動作主の存在を推測できるのは5例(ミラーの視点(「わたくし」・ミラー))である。

聞き手が具体的に文中に現われているのは2例(皆様とそちら=2人称者を指している)であり、手がかりを介して聞き手に向けられていることを推測できるのは18例(聞き手・司会者・A・B)である。

語形には「参る・おる・申す⁸・サ変+いたす⁹・ておる・いただく¹⁰」の6種が

8 自己を名乗る際の「と申します」の形が提示されており、「私は彼に申します」や「部下の吉田が申しますには一」といった例はみられない。

9 この形はサ変以外の動詞については「お/ご」の付かない「持ちいたす」や「願いいたす」とは言えない。語形については菊地(1997a: 298)を参照のこと。

10 「いただく」には、自分の行為をへりくだって述べるという謙譲語Bとしての用法もある。菊地(1997a: 227)を参照のこと。

取り上げられている。①・②（練習C）の場面ともに「フォーマル」か「インフォーマル」かの提示がなく、②の会話ではインタビューを受けるという状況により「フォーマル」となる。

4.2.1 謙譲語Bの検討

謙譲語のB類は、主語を低め、補語を高めるというものではなく、聞き手に向かうといういわば丁寧語に似た性質がある。「低められる主語は原則として1人称者（話手自身か身内）であり…」（菊地 1997a : 270）という原則を理解していれば、主語の1人称が聞き手に向けた謙譲語使用であることがわかる。たとえば「参ります」の場合、「参る」と「ます」を別々に扱うのではなく「参ります」全体が聞き手に向けられているのであり、第三者が文中に現われてもその人物に向けられているのではないことも理解されよう。

注目すべきは、「話し手の提示」部分に斜めに記した9例であり、これらの謙譲語使用を解く鍵は「ウチ・ソト」概念の理解が必要であるということである。話し手は第三者を自分の領域に位置付け、相手の領域である聞き手に対して、その第三者の行動について述べるという関係の位置付けがわからないと、この謙譲語の使用が何に基づいているのかが理解できないのではないか。

4.3 謙譲語A B

謙譲語A Bとは、「行為の向かう先である補語に対する敬語と、聞き手に対する敬語という2面をあわせもつ敬語」であり、「お/ごーいたす」という形の類を指す。

表 7 場面・待遇対象と謙譲語 AB の提出状況

① 例文

提出場	▼動作主(話し手) [動作の与え手]		提出語彙 [▲▲謙譲語＋ 丁寧語]	動作行 為方向 →	▲△待遇対象 [動作の受け手]	
	話し手	(話し手の仮提示)			(受け手の提示)	(受け手の仮提示)
例文 7	無	(わたくし) [ミラーの視点]	お願いいたします		無	(あなたに)

唯一 1 例のみの提出であり、手がかりを介して動作主 (無) が存在することを推測できる。しかし、話の向けられる相手がはっきりしない。

場面は「フォーマル」か「インフォーマル」かの提示がない。

4.3.1 謙譲語 A B の検討

謙譲語 A B は、主語をニュートラルよりも低め、補語対象を高める。それによって聞き手への丁重さをあらわすという性質がある (菊地 1997a : 303)。また、「主語はもちろん 1 人称者で、このように [補語はあなた] 1 人称者から 2 人称者への敬語として使うのが、『お/ごーいたす』の普通の言い方である」 (菊地 1997a : 303) ことを踏まえたうえで例文を扱う¹¹。

例文ではミラーの言葉として提出されていることが読み取れるが、動作主の「わたくし」と待遇対象の「あなた」を文中に提示して、「(わたくしがあなたに) お願いいたします。」の () を省略させた表現であることを理解させたほうがよいと思われる。

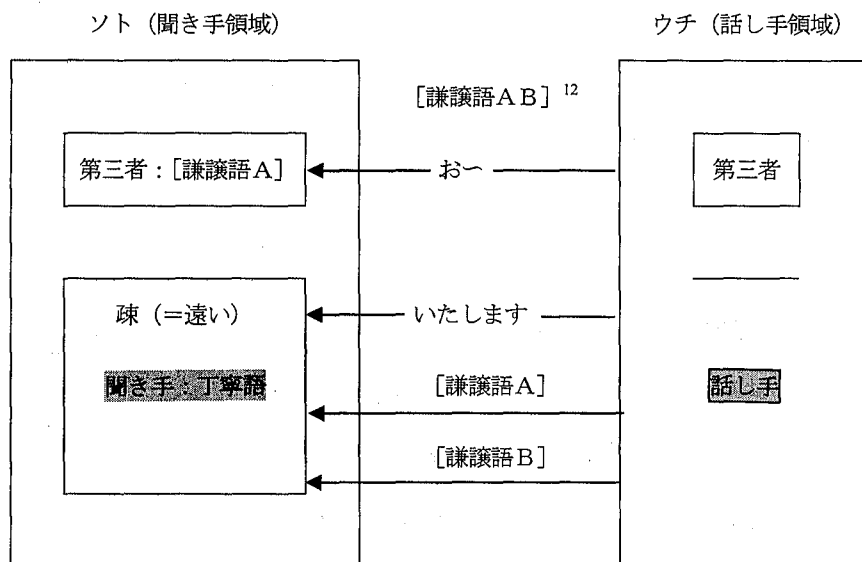
4.4 謙譲語のまとめ

50 課の計 71 例のうち、謙譲語が大方聞き手に向けられている。つまるところは話し手は聞き手だけを意識すればよいのであるが、例文の中には第三者に向けられている例もみられる。この場合話し手と聞き手、第三者 (ミラー・部長・先生・先

11 第三者に対する謙譲語 A B については菊地 (1997a : 304) を参照されたい。

生の奥様・××さん) の関係がどのような位置付けになるのかを明確に示さなければならない。そこで次の図 2 を示したい。

図 2 聞き手及び第三者に対する謙譲語使用 [網掛けは、発話の当事者同士を意味する。]



話し手は、第三者には謙譲語 A と謙譲語 A B の「おー」を用いて、聞き手には謙譲語 A (話し手と聞き手の 2 者間での対話の場合) と謙譲語 B、それに謙譲語 A B の「いたします」を用いる。

5. 指導法の一提案

5.1 49 課の尊敬語の場合

5.1.1 学習者の誤用例から

3.5 の図 1 を教科書の例文に当て嵌めると次のようになる。文中の () は筆者

12 菊地 (2003b : 13) は第三者を補語とする場合について述べており、図 2 ではそれを参考にした。

によるもので、聞き手と第三者との関係を示す。

- (3) (あなたと同じ会社に属する) 課長はもう資料を読まれました。(練習B-2)
- (4) いつ (あなたが知っている) 佐藤さんにお会いになりましたか。(練習B-4)
- (5) (あなたに関係する) お子さんのお名前は何とおっしゃいますか。(練習B-6)

左の枠内は聞き手(網掛け)と第三者を表し、右の枠内は第三者に対する「ソト」による尊敬語とソトに位置付けられた聞き手に対する「疎」による丁寧語(網掛け)である。

話し手が直接聞き手に向けた2者間でなされる対話では、図1の聞き手だけを捉えればよく、この場合尊敬語形式を覚えれば、「ます」形で物事を考える練習を続けたとしても、たとえば「行きます」の尊敬語は「行かれます」「おいでになります」「いらっしゃいます」であり、その過去形は「行かれました」「おいでになりました」「いらっしゃいました」であると覚えても、「ソトと疎」に基づき尊敬語と丁寧語を用いればよい。

- (6) どちらへ旅行にいらっしゃいますか。(練習B6-1)
- (7) もう花見に行かれましたか。(練習B2-1)

ところが、「いらっしゃいました」の形を丸暗記してから下記(8)のような第三者敬語を扱うと、学習者は次のような誤用を犯す。

- (8) a はい、もう「いらっしゃった」と思います。(練習B8-例)

b はい、もう「いらっしゃいました」と思います。(学習者の誤用例)

「ソトと疎」による「いらっしゃいます」「いらっしゃいました」を丸暗記した場合、「疎」を含めない「ソト」の判断に基づいて用いられる原型(8)aが選ばれずに聞き手への「ソトと疎」の判断をそのまま第三者に対して用いる(8)bが選ばれや

すくなる¹³。かりに敬語動詞への変換練習が到達目標に置かれても、第三者が文中に登場する以上、ウチ・ソト概念は不可欠であり、また具体的な人間関係の提示がなされないと、人間関係と敬語表現の呼応自体が理解できず、のちのち当惑を招く要因となる。いかに当惑させないようにできるか。そのためには教師が図1の概念を提示して、さらに表現の向けられる人物を文中に出現させるといった作業を行うことで人間関係と敬語表現の呼応に慣れさせるように導くとよい。

5.1.2 記号を提示する作業

3.5の図1のウチ・ソトの概念と親・疎関係の概念を提示してから、次の練習B(p128)にとりかかる。

(9) 田中さんはもうパーティー会場へいらっしゃいましたか。(はい)(練習B—例)

→ はい、もういらっしゃったと思います。

(9)の模範例文にしたがって練習を行う場合、

(10) 先生は何時ごろ来られますか(2時ごろ)。(練習B—3)

→ 2時ごろ来られると思います。

のように、尊敬語の部分(点線部)だけを変換させるという練習で終わるのではなく、次の図3のように話し手(わたし)と聞き手(あなた)を文中に出現させることで第三者(田中さん)との区別をして、誰に対して尊敬語を用いているのかを明確に示す。これによって人間関係と表現の呼応が照合できる。

13 杉山(2003:262)は「外国人は、敬語を使う時に丁寧体は絶対になければならない要素だと考えやすい」と指摘している。この指摘は「です」「ます」体での練習の問題点となる。

図3 人間関係と敬語表現の呼応関係の照合

(9)' ＋あなた：△田中さんはもうパーティー会場へ△△いらっしゃい＋ました

か。(はい)

→ ＋わたし：はい、(わたしは) (△田中さんが) もう△△いらっしゃ
ったと思ひ＋ます。

(10)' ＋あなた：△先生は何時ごろ△△来られ＋ますか。(2時ごろ)

→ ＋わたし：(わたしは) 「2時ごろ (△先生が) △△来られる」と思ひ＋ま
す。

「網掛け・下線・枠・符号」は教師が提示する部分である。以下では、これら個々の提示を総括した場合〈記号の提示〉という呼び方をする。「網掛け」は「人間関係」を表す。点線どうし、下線どうし、枠どうしはそれぞれ対応していることを表す。さらに「△ (=高める人物の意)」「△△ (=尊敬語の意)」「＋ (=遠いの意)」のような符号を模範例文に付することで、高める人物と親疎関係を表すと同時に、敬語表現の統語的な位置関係も示している¹⁴。

第三者敬語を理解するには、尊敬語と丁寧語がそれぞれ誰に対して向けられているのか、(9)'のように聞き手には「丁寧語」を、第三者の田中には「尊敬語」を用いることの深層をきちんと示すことが重要である。そうでなければ第三者が登場することによって、尊敬語が聞き手に向けられるのか、第三者に向けられるのかの判別にと惑いを覚え、このような状態で練習B8に直面すると当惑してしまう。もちろん練習B8の例文にあるような「先生は何時ごろ来られますか。」「部長は中国語をお話しになりますか。」「課長はお酒を召し上がりますか。」といった内容であれば、3人の関係が位置付けられないと敬語表現を扱いきれないことは言うまでもな

14 「符号・下線」などの意味についての詳細は現在印刷中である。点線は「尊敬語」性を、波線は「謙譲語」性を、下線は「丁寧語」性を表す。

い。以上、第三者敬語を扱う場合には、1.ウチ・ソトの概念と親・疎関係の概念を提示したうえで、2.尊敬語と丁寧語の向けられる人物を確認させる作業が重要であることを述べた。

5.2 50 課の謙譲語の場合

5.2.1 話し手の思考過程と記号の提示

文型の定着を意図している練習Aでは謙譲語動詞に注目が集まりやすく、学習者にはどのような人間関係に基づく謙譲語使用なのかが読み取れない可能性がある。

() はとくに注意を喚起する点である。

(11) 私がかさをおかしします。(誰に対して貸すのか?) (練習A—1)

(12) 私がきょうのよていをごせつめいします。(誰に対して説明するのか?) (練習A—2)

(13) きノウ先生のお宅へうかがいました。(誰が行ったのか?) (誰に対して言っているのか?) (練習A—4)

(14) 私はアメリカからまいりました。(誰に対して言っているのか?) (練習A—5)

謙譲語動詞の変換練習に固執するならば、わざわざ()の部分を提示することもないが、提示なくしては謙譲語を用いる意義そのものが学習者には理解しにくいのではないだろうか。菊地の言葉を借りて言えば、(11)・(12)・(13)は補語を高める謙譲語Aのタイプであり、(14)は聞き手に向けられる謙譲語Bのタイプである。かりに()の人物を提示すれば、(11)と(12)は聞き手(聞き手の場合、補語がたまたま聞き手と一致したものである)もしくは第三者、(13)は前者が動作主の私もしくは私に属する人物、後者が聞き手、(14)は聞き手、といった人物が設けられる。

以上、例文には謙譲語でも機能そのものが異なるタイプが提出されている。続いて謙譲語Aと謙譲語Bのそれぞれについて掘り下げてみたい。

5.2.2 謙譲語Aのタイプ

ここでは謙譲語Aの性質をどのように理解させられるかについて述べたいと思う。(13)「きのう先生のお宅へうかがいました。」を取り上げると、学習者は例文を提示された場合、はじめに未習語彙である「うかがいました」の実質的部分に注目が集まる。教師からは「うかがいました」の「うかがう」は「訪問する」の「謙譲語」であるという説明が与えられると、「謙譲語」が用いられている文であることが理解されるだろう。続いて教師が行わなければならないのが、文中に人称（ ）を出現させて「点線」「波線」「枠」を用いてその敬語が誰に向けられているのかを示すことである。

(13)「きのう（わたくし）が（あなたと関係のある）先生のお宅へうかがいま
した。」

この時点では学習者は、「先生」に対して「うかがう」、「あなた」に対して「ました」が向けられていることを理解できればよい。そのためには学習者が「点線」と「波線」が表す意味の誤解を招かないように、教師には適切な（脚注14のような）説明をすることが求められる。次にいかにして敬語表現が形成されたのかに説明が移るわけだが、例文には動作主が提示されておらず、想像を拡張すれば「わたくし」の身内であることも考えられるため、話し手の観点により次のように解釈される。

①話し手は聞き手を位置付ける

- 1) （話し手である）わたくしが（聞き手である）あなたを遠い関係に位置付ける。
- 2) 身内の発話の場合、わたくしが動作主である身内を自分側に位置付ける。
- 3) 1) に応じて、「あなた」に対して「わたくしが丁寧な態度をとる」という意図を抱く。
- 4) 3) に応じて、「わたくしが丁寧語を用いる」という意図を抱く。

- 1) から 4) までを経て、『わたくし・身内』が『あなた』に『—ます・ました』が成立する。

②話し手は聞き手と第三者を位置付ける

- 5) わたくしが話の場にはいない第三者（先生）の存在を意識する。
6) 5) の第三者の人物をあなたと関係がある人物として位置付ける。
7) 6) の「第三者」に対して「わたくしが謙った態度をとる」という意図を抱く。
8) 7) に応じて、「わたくしが謙譲語を用いる」という意図を抱く。
9) 6) に応じて、第三者が存在する場所を意識する。
10) 第三者の存在する場所に向かうということを表現に現す。「(わたくし・身内) が (先生の家) へー」
11) 7) の意図が成立しているので、「家」を上げる語彙「お宅」に改める。
12) わたくしが謙譲語を用いる人物に「先生のお宅」を規定して、「うかがう」を選んで用いる。
(わたくし・身内) が (あなたと関係がある先生のお宅) へ「うかがう。」
13) 4) に応じて、「うかがう」に「ます」を添えて用いることを意識する。

①に② (5) から 13) まで) の過程を経て、「きのう (わたくし・身内) が (あなたと関係がある) 先生のお宅へうかがいました。」が成立する。

上記のような思考過程を追う作業だけでは統語的な位置関係がわかりにくい。そこで思考過程により形成された表現に「符号」を付して「▼わたくし・身内があなたと関係がある△先生のお宅へ▲▲うかがいました。」という具合に、先の(13)に動作主である「身内」を加えた〈記号の提示〉により理解の促進をはかる。波線どうしが対応しており「▼」の人物の行動として「▲▲」の謙譲語が用いられており、それが「△」の人物に向けられていること。また、枠どうしが対応しており「ま

した」は聞き手である「あなた」に向けられていることを示している。このような段階を通じて謙譲語Aの性質を理解させることができる。以下に文中に人物を出現させた〈記号の提示〉による模範例文とその関連例文を示しておく。

謙譲語Aのタイプ

(11)' (▼わたくし・身内) が (＋△あなた) に かさを▲▲おかしし＋ます。

(12)' (▼わたくし・身内) が (＋△あなた) に きょうのよていを▲▲ごせつめいし＋ます。

(13)' きのう (▼わたくし・身内) が (＋あなた) と関係のある) △先生のお宅へ▲▲うかがい＋ました。

例：(11)" ▼わたくしの弟が (＋△あなた) に かさを▲▲おかし＋ます。(作例)

(12)" ▼弊社の吉田が (＋△あなた) に きょうのよていを▲▲ごせつめいし＋ます。(作例)

(13)" ▼わたくしの母が (＋あなた) の夫である) △先生のお宅へ▲▲うかがい＋ました。(作例)

5.2.3 謙譲語Bのタイプ

(14) 「私はアメリカからまいりました。」を取り上げ、思考過程を追うと次のように展開される。以下敬語表現が形成される部分について述べる。

①話し手は聞き手を位置付ける

- 1) (話し手である) わたくしが (聞き手である) あなたを遠い関係に位置付ける。
- 2) わたくしが、動作主である身内を自分側に位置付ける。
- 3) 1) に応じて、「あなた」に対して「わたくしが丁寧な態度をとる」という意図を抱く。
- 4) 3) に応じて、「わたくしが丁寧語を用いる」という意図を抱く。

- 5) 「あなた」に対して「わたくしが謙った態度をとる」という意図を抱く。
- 6) 5) に応じて、「わたくしが丁重さを表す謙譲語を用いる」という意図を抱く。
- 7) わたくしが謙譲語を用いる人物に「あなた」を規定して、「まいる」を選んで用いる。
- 8) 4) に応じて、「まいる」に「ます」を添えて用いることを意識する。
- 1) から 8) までを経て、「私はアメリカからまいります/ました。」が成立する。

以上より「▼わたくし・身内はアメリカから▲▲まいりました。」という内容を「聞き手 (▲あなた)」に向けた発話行為であるという具合に謙譲語 B の性質を理解させる。

以下に文中に人物を出現させた〈記号の提示〉による模範例文とその関連例文を示しておく。

謙譲語 B のタイプ

(14) 「▼ (わたくし・身内) はアメリカから▲▲まいりました。」⇒ (▲あなた) に対して

例：▼私の家族はニューヨークに▲▲おります。⇒ (▲あなた) に対して (例文 4)

▼課長の中村は今韓国へ▲▲出張しております。⇒ (▲あなた) に対して (練習 B5-2)

▼部長の松本は 11 時ごろ支店へ▲▲まいりました。⇒ (▲あなた) に対して (練習 B5-4)

以上のように、教師が説明をすべきであるという箇所については自身で補うことが課される。たんに「来る」の謙譲語は「まいる」であるといった語彙変換の説明だけで終わる、敬語動詞の置き換え作業だけするといったことでは人間関係に応じ

た謙譲語を扱いきれない。したがって、当該の文中に人称が現れていない場合には詳細な人間関係の位置付けと、それを反映した謙譲語、及び謙譲語の質的働きを示すことが学習者の適切な謙譲語使用へと導くのである。

5.3 運用を重視した練習問題Cの扱い方

50 課の練習C－3 では第三者敬語が提出されている。スクリプトには具体的な状況の説明はないが、ある人物とIMCの人物が電話で話している挿絵があるので、この絵と会話の流れを通じてBがミラーに電話を掛けて、Aが応対しているという状況が読み取れる。文中に人物を出現させて〈記号の提示〉を示すと、次のように複雑であることがわかる。

	発話者	発 話 内 容
1	A	はい、IMCでございます。
2	B	(▼わたくしが) 田中と▲▲申します、/△ミラーさんは△△いらっしゃいますか。
3	+▲A	ミラーはただ今出かけておりますが…。
4	B	そう+ですか。じゃ、また (▼わたくしが △ミラーさんに) ▲▲お電話します。
5	+A	

Bの発話2・4に注目すれば、謙譲語Aと謙譲語Bの機能の性質が理解できないと、波線を施した謙譲語の向かう先が「A（＝聞き手）」に対してなのか、「ミラー（＝第三者）」に対してなのかの判断に迷うことが想像される。「申します」と「お電話します」が「A」と「ミラー」のどちらに向けられるのか。〈記号の提示〉により、前者発話2の「申します」は発話3の「A」に向けられるのであって「ミラ

一」には向けられていないことが符号と枠により示される。後者発話4の「お電話する」は「ミラー」に対して向けられ、「ます」は発話5の「A」に向けられていることが明瞭となる。発話2のように、一文に謙譲語と尊敬語が同時に出現している場合には、間を分かち（「/」）混同を避けるようにすることで、「ミラー」に対して「いらっしゃる」が向けられていることが明らかとなる。上記の敬語を抽出したのが次の図4である。

図4 敬語の向けられる先

〔網掛けは、発話の当事者同士を意味する。〕

ウチ	ソト・疎
田中＝話し手B	ミラー＝A側の第三者 IMCの人＝聞き手A
	▲▲申します
△いらっしゃい	+ます
	+です
▲▲お電話し	+ます

〈記号の提示〉によって明瞭となるのが次の点である。

- ・ ミラーの言動に対しての敬語表現には、尊敬語の特別な形の「いらっしゃる」と謙譲語A「お電話する」が選ばれる。
- ・ 聞き手であるAに対しては、謙譲語B「申します」と「です」「ます」が選ばれる。

本文には、筆者が仮に設けた発話5の部分がないため、発話4の謙譲語Aと「です」「ます」の向けられる対象が漠然としてしまう。また、具体的な状況の説明が提示されていないため、学習者には「電話を掛ける」という「フォーマル」の場面が作用していることが読み取れない可能性があり、教師からの説明がなされない場合は、学習者自身が会話が行われる状況を想像する必要がある。

ウチ・ソト領域という概念が根底にあり、〈記号の提示〉を拠り所に敬語表現を

形成できれば、第三者敬語にも対処できるようになる。概念が根底にないままの形だけの模倣練習を繰り返すことは避けなければならないことを上記の例が物語っている。

5. まとめ

本稿では、教科書『みんなの日本語』を考察し、人間関係とその敬語表現を整理した。その結果例文には数多くの第三者敬語が提出されているものの、話し手と聞き手および第三者の位置関係となる人称が必ずしも文中に現れているわけではないという現状が明らかになった。この現状を踏まえ、敬語を扱う場合には、①ウチ・ソトの概念と親・疎関係の概念を提示したうえで、②文中に人称を出現させて敬語の向けられる人物を確認する作業が行われるべきであることを述べた。また、教師が行う作業として文中に人称が現れていない場合は、一度人物を出現させて「符号・下線・枠」を用いて呼応関係を明確に示すという方法を提案した。早期の段階では、人間関係を反映した言葉遣いを扱うことは難しい。だからと言って、文中に第三者が現れる以上、人間関係の説明を抜きにしてよいというわけにはいかない。関係の説明がなされないということは、つまるところは人間関係を無視した敬語の形の変換作業のみに終止することになる。それどころか、文中に現れた第三者の存在が敬語使用を阻害する要因になるとも考えられる。学習者は第三者敬語の扱いに不馴れである。教師は試行錯誤を繰り返し、よき指導法を編み出さねばならない。本稿で述べた学習理論は、まだ実践の面が不十分であることは否み難い事実である。本理論をいかに運用できるかは今後の課題としたい。

参考文献

- 尾崎学「待遇表現使用の前提となる待遇意識について—『です』・『ます』敬語の使用が意味するもの—」『世新大学人文社会学報第5期』、2004 a。
- 「待遇表現教育における適切な表現を使い分けるための意識化の大切さについて—台湾で日本語を学ぶ学習者を例にして—」『東呉日本語教育学報 27』東呉大学日本語文学系、2004 b。
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵『敬語表現』大修館書店、1998。
- 菊地康人『敬語』講談社学術文庫、1997 a。
- 「敬語とその主な研究テーマの概観」『朝倉日本語講座 8 敬語』朝倉書店、2003b。
- 杉戸清樹「待遇表現としての言語行動—『注釈』という視点—」『日本語学 7 月号、Vol2』明治書院、1983。
- 杉山アイシェヌール「外国人から見た敬語」『朝倉日本語講座 8 敬語』朝倉書店、2003。
- 山本富美子「初級敬語教育に関する 1 試案」『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会、1992。

教科書

- 『みんなの日本語』スリーエーネットワーク（『大家的日本語進階Ⅱ』大新書局）、2000。